

今日の説教のポイント<使徒言行録14章1~7節>

①苦難に遭うことは不幸の印ではなく、神の国に入れられる印。

パウロたちは、ピシディア州のアンティオキアで迫害を受け(13章)、イコニオンに行ったら殺されかけてリストラに難を逃れ(14:6)、そこでついに殺されたと思われるような状態に至りました(14:19)。ひどい話だと思いますが、大事なことは彼ら自身がどう思っていたかです。後にパウロたちはこれらの町で信仰者となった人たちに、「**私たちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なくてはならない**」と言って、「**信仰に踏みとどまるように励ました**」のです(14:22)。信仰を持ったら、苦しい目に遭うことについての考え方も変えられて行くということでしょうか。実際、パウロたちが迫害に遭うのを目にしたこれらの町の人々が、自分たちの町それぞれで教会を建てていったのです(14:21以下)。

②パウロたちは徹底して力に対して力で返さず。主の平和を知るから。

ここでもう一つ心に残るのは、パウロたちが、暴力を持って向かって来る人々に暴力でもって返すことをどこまでもしなかったことです。ただ逃げるだけ、そう言ってもいいほどに、パウロたちの姿は無抵抗です。なぜでしょうか？ かつてイエス様に起こった同じような出来事を思い出します。イエス様たちを歓迎しなかったサマリア人の村に怒った弟子たちは、「主よ、お望みなら、天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか」と言いました。しかし、イエス様は彼らを戒められ、別の村に行かれたのです(ルカ 9:53-54)。キリスト教時代の初期、実際、このような姿の下で、福音は世界中に拡がって行ったのです。「**義の実は、平和を実現する人たちによって、平和のうちに蒔かれるのです**」(ヤコブ 3:18)とある通りです。

キリスト教を批判する人の中に、「歴史において、キリスト教国が他の国、他の民族に力でもってしたことを考えると」、と言われる方がいます。その通りだと思います。上に記したように、イエス・キリストその方は全く逆の道を歩まれたのです。世は「力」の強さを誇ります。しかし、私たちは「平和」を誇りましょう。力より平和を主が喜ばれ、それこそ、力より大きな力を平和が持っていることを知ったのですから。